

第2章 銃後

札幌空襲① 父が亡くなった丘珠の空襲

いわなみえいこ
岩波英子さんのお話から

私の父は、丘珠の空襲で弾に当たり、たった一発の弾で死んでしまいました。私も同じ部屋にいたのですが、たった一発の弾が父の肩から腰へ抜け、目の前で亡くなってしまいました。

戦争当時、丘珠の飛行場には日本の飛行機がたくさん飛んで来ました。アメリカの飛行機が来たのは一日、それもほんの数時間だけです。丘珠の飛行場を攻撃して行って、丘珠飛行場のそばにある私の家にも被害があったのです。丘珠の方は、その一度きりの空襲だけでしたので、戦争と言われても実感がわきません。ただ、農家の人でも戦争に召集されて、お母さんと子どもをおいてお父さんが兵隊になって戦争に行きました。そして戦争から生還する人もいれば、亡くなる人もいましたが、当時の丘珠では、戦争で死ぬと個人でお葬式をしないで、丘珠村をあげてお葬式（村葬）をあげました。戦争で亡くなった家族の方は本当にかわいそうでした。

そのころは、まさか私の父が死ぬとは思っていませんでしたので、気の毒だと思っておりましたが、私が二十歳の時の昭和二十年（一九四五年）七月十五日に、父親が亡くなってしまったのです。八月十五日が終戦の日だったので、あとたった一カ月過ぎていけば、そのまま生きていられたのです。たった一発しか部屋に入ってこなかったのに、その一発の弾に当たって亡くなってしまったのです。

空襲の時、私は母親から言われて、空襲になった時に備えてポンプの水を出してバケツでかける訓練をしていました。それで、飛行機がだいぶ低く飛んでいったなど思ったら父が撃たれ

○兵舎へいしゃ 兵隊が日常の生活を
する建物。

てしまったのです。どうして家が撃たれたかという、戦争が激しくなってきた、兵隊さんは兵舎へいしゃにいと狙われるので、お寺や学校、神社に泊まっています。兵隊さんはそこではご飯はんを作れないので、兵舎へいしゃの飯場はんばにリヤカーで三、四人が歩いてご飯を取りに行った時、ちようど飛行機が来て、動くものは何でも撃ってきました。兵隊さんがあわてて私の家の果物の木に隠れようと畑に入ったところを狙った流れ弾だまが、私の家に入ってきたのでしよう。空襲が終わってから、みんな家あのトタン屋根を見ると、五十箇所くらい穴が開いていました。

○配給はいきゅう 米や味噌みそ、砂糖等の食べ物などの物資ぶつしを、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。

日本が戦争をやっている間、本当に食べるものがなかったのです。当時の丘珠は田んぼがなく、玉ねぎばかり作っていました。農家の人はお芋でも何でも作って食べることができずが、農家ではない人、例えば学校の先生のお子さんやお寺のお子さんなどは本当に食べる物がありませんでした。当時、食べ物などは全部配給きゅうだったので。組合長をやっていた私の父親が、お寺の人や学校の先生も同じ人間だから、農家への特別配給はいきゅうを分けてあげようと説得して、私の地域では、農家以外の人にも農家への特別配給品はいきゅうひんが配られることになりました。そうでなかったら先生たちは本当に食べる物がなくてかわいそうでした。今は馬や牛が食べるもの



空襲

イメージ図

父が亡なくなった丘珠の空襲

○えん麦^{ばく} イネ科の一年生または二年生作物。おかゆ状に煮て、温かい牛乳と砂糖をかけて食べるオートミールとして食用とするが、主に馬などの飼料として重要。

○徴用^{ちようよう} 国民を強制的に動員し、一定の業務に従事させること。

ですが、えん麦^{ばく}が配給^{はいきゅう}になったこともありま。麦と違いモソモソしてとても食べられませんでした。ただ、本当に食べるものがなくて、えん麦^{ばく}を食べていた人もいました。戦争中は一人何点^{なんてん}という切符^{きっぷ}の点数^{てんすう}(配給^{はいきゅう})制度があつて、着物を一枚買うとたくさん点数が引かれるので着物も買えないのです。丘珠には田んぼがないので、お米を買うためにお米を作っている農家に着物を持って行って、着物とお米を交換したのです。ただ、それが警察に見つかり、みんな没収^{ぼくしゆう}されてしまいま

す。戦争当時、私は洋裁を習っていました。みんなから農家の方が洋裁を習っていると徴用^{ちようよう}にかかると言われました。昔は徴用^{ちようよう}という制度があつて、女の人でも農家の人でも冬は、あちこちの軍隊の服を作る勤労奉仕をさせられました。そこで、洋裁をやめようかと思つていたところ、丘珠で飛行機の修理部隊が女子職員を募集しているという看板を見ました。家に帰って、父に受けてよいかと聞くと、お前が受けたかったら受けなさいと言われて、受けたら受かりました。

職場に行くと、私は部隊長付きになって電



イメージ図

戦時中のポスター

話交換と庶務の両方をするようになりました。修理部隊では、私が書類を書かないと給料を出してもらえないので、給料がほしい隊員さんが「まだかまだか。」と私のところに来ました。ある日、給料の書類を書いていると電話が入り、部隊長に電話をつなぎました。うっかりつないだ電話を切るのを忘れていたのです。そうすると電話口から「千島全滅。」と聞こえたのです。悪いものを聞いてしまったと思って、すぐ受話器を置きました。

しかし、当時の日本の発表やラジオ放送は遅くて、警戒警報と言った時にはもう飛行機がきているし、空襲警報と言っている時には、もう飛行機なんて飛んでいってはいないのです。それだけ遅れているから、普通の人もそれに従っていたら行動できませんでした。

当時、割り切れない思いがしたのは、部隊にキャラメルでも飴でもお菓子でも何でもあったことでした。私はその職員だからもらえましたが、一般人が食べ物に困っていた時に、軍隊にはキャラメルでもみかんでもパイでも何でもありませんでした。まちに行くと「欲しがりません勝つまでは。」という標語がどこにでも書いてありました。小学校でも朝礼で校長先生におはようございますをして、教室に入る前に「欲しがりません勝つまでは。」と言ってから入ったものです。

戦争が終わった時は、ボーっとして何の反応もできませんでした。しかし、戦争で父を失った悲しみは今でも忘れられません。戦争は決して起してはいけません。平和な世の中がずっと続くよう皆さんも札幌の空襲で亡くなった人がいることを忘れないでください。

DATA

平成21年度東区平和事業

聴き取り

- ・平成22年1月5日
- ・札幌小学校



岩波英子(いわなみ・えいこ)さん

- ・大正14年(1925年)生まれ
- ・札幌市東区在住